江戸および明治時代の史料にみられる江戸町屋敷居住者の
夏季の滞在空間と環境調整行動

－江戸時代後期の江戸町人地における居住者の生活行動を考慮した夏季熱環境の評価 その2－

STUDY ON RESIDENT'S LIVING SPACE AND THEIR ENVIRONMENTAL
ADJUSTMENT BEHAVIOR IN EDO "MACHIYASHIKI" DURING SUMMER
BASED ON HISTORICAL MATERIALS IN THE EDO AND MEIJI PERIODEvaluation of summer thermal environment in the residential areas for the Edo townsmen
in the late Edo period considering the resident's living activities Part 2

高田 眞人*, 村上 暁信**, 梅干野 晃***

Masahito TAKATA, Akinobu MURAKAMI and Akira HOYANO

In this study, the daily changes in the resident's living space and their environmental adjustment behavior in summer was examined, aiming at evaluating the thermal environment in the Edo townsmen's residential area using the numerical simulation. The information of resident's living activities was extracted from the historical materials in the Edo and Meiji period, concerning the types of the residents and the daily time sections. The resident's living space and environmental adjustment behavior was identified from those extracted resident's living activities, and the characteristics of the daily changes of living space and environmental adjustment behavior were grasped.

Keywords : Edo "Machiyashiki", Summer thermal environment, Living space, Environmentally adjusting behavior, Historical materials

江戸町屋敷, 夏季熱環境, 滞在空間, 環境調整行動, 史料

1. はじめに

本研究は、江戸時代後期の人口密集地^{注1)}である江戸町人地^{注2)}に着目し、江戸町人地における熱環境緩和のための建築的な工夫と居住者による生活行動を考慮しつつ、当時の熱環境の特徴を明らかにし、評価することを目的としている。江戸町人地は、熱中症や熱帯夜など夏季における熱環境の悪化が問題となっている現代都市とは建築や空間の構成が大きく異なっているといえる。そこで本研究では、3D-CAD 対応熱環境シミュレータ¹⁾を用いて江戸町人地の表面温度分布を再現した上で、上記の点について考察する。

前報²⁾では、数値シミュレーション¹⁾による熱環境の評価に必要な情報(表1(a))の中で、空間情報である江戸町屋敷^{注3)}内の建物の配置計画・空間形態・構成材料を、既往研究と当時の史料より明らかにし、熱環境の視点から江戸町屋敷の表面温度分布の再現に必要な情報を整備した。その情報より対象地として選定した京橋地区守山町の数値シミュレーション用 3D-CAD モデルと熱物性値のデータベースを作成した。

一方、江戸町人地の屋外生活空間の表面温度分布に関係して、江戸町人による通りへの打ち水などの生活行動や、夕涼みの散歩など時間帯によってより良好な熱環境を求めて滞在空間を変化させる生

表1 居住者の生活行動を考慮した熱環境評価に必要な情報

分類		必要な情報	
(a) 空間情報		配置計画, 空間形態, 構成材料	
(b) 居住者の生活行動	環境調整行動	生活行動による(a)空間情報の変化(緑台の設置, 打ち水 etc.)	居住者の属性, 時間区分
	環境適応行動	滞在空間	
(c) 気象条件		気温, 湿度, 風速, 雲量, 水平面全日射量	

※ 灰色部: 本報で扱う事項

活行動が当時の史料より知られている。当時の熱環境は、空間形態や構成材料だけでなく、このような町人の工夫や滞在空間の意図的な変化にも影響を受けていたといえる。本研究では以後このような町人の工夫を環境調整行動と、滞在空間の意図的な変化を環境適応行動と記載する(表1(b))。屋外生活空間の熱環境を評価するためには、対象者の位置毎に評価する必要がある。したがって、江戸町屋敷の屋外生活空間の熱環境の評価に際して、居住者による滞在空間の選択と、環境調整行動の把握が不可欠である。

ここで、対象地の表面温度分布に居住者の生活行動が影響を及ぼすか否かを把握する場合、瞬間瞬間の生活行動よりもある時間帯にどのような行動を行っていたかが影響するため、各時間区分における

* 東京工業大学大学院 特別研究員・博士(工学)

** 筑波大学大学院 講師・博士(農学)

*** 東京工業大学大学院 教授・工博

Postdoctoral Fellow, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

Assoc. Prof., University of Tsukuba, Ph. D.

Prof., Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

代表的な生活行動とその滞在空間の範囲を把握する必要がある。その際、生活行動には、環境調整行動のみならず、仕事や食事を含めた日常の生活行動も対象とする必要がある。そして居住者が生活行動に合わせて行動する範囲はある程度限られているため、本研究では生活行動が及ぶ空間の範囲を生活空間として把握する。したがって具体的な位置は特定せず、対象町屋敷内においてある種の生活行動が行われ得た範囲を「滞在空間」として設定する。また夏季における江戸町人の一日の生活行動は、当時、職業と性別により異なっていたはずである。本研究ではそれらを「居住者の属性」と定め、まとめて分類する。

江戸町屋敷における生活空間の熱環境を、居住者の生活行動を考慮し、表面温度より分析・評価するためには、解析に先立ちまず、1) どのような環境調整行動をどのような属性の居住者がどこでどの時間帯に行っていたのか、2) どのような属性の居住者が、どの生活空間を滞在空間としていたのか、を明らかにする必要がある。

以上の観点より、本報では、江戸町人地の町屋敷居住者の夏季一日における滞在空間と環境調整行動の内容とその変化を把握することを目的とした。

2. 江戸町人地の町屋敷居住者の生活行動に関する既往研究

建築史の分野では、玉井（1977）³⁾が近世における町方史料を分析する一つの方法上のモデルを提示している。この中で、玉井は江戸時代後期における江戸日本橋町人地の複数の町屋敷の住民構成を沽券絵図より明らかにした上で、その住民構成の変遷を幕末期まで分析している。また小木（1979）⁴⁾は、江戸時代の影響が残る明治初期における東京の旧町人地に暮らす人々の生活様式を当時の東京の火災状況に関する統計データや人口動態などから明らかにしている。次に80年代後半から90年代にかけて、吉田伸之は一連の研究で部分社会を丁寧に分析することで社会の全体像に迫ろうとする「分節的把握」を行っている。その中で吉田は、都市性（都市的要素）という広範な概念を導入することで研究対象や素材を従来の建築史・都市史だけでなく、考古学・経済史など多様な分野に拡大し、更に塚田（1987）の提唱する「重層と複合」論⁵⁾を前提に都市の歴史空間と社会を密接不可分なものとして捉える「社会＝空間構造論」を援用している。町共同体の存在形態は町空間に構造化されているという視点から、フィジカルな空間形態に関連する史料から当時の社会を明らかにする研究の成果は『日本都市史入門』Ⅰ～Ⅲ巻（1989-1990）⁶⁾にはじまり『日本の近世』（1992）⁷⁾を経て、『近世大阪の都市空間と社会構造』（2001）⁸⁾など、多数提示されている。

また近世の都市を考える上で不可欠である寺院と町との関係については、伊藤毅による中世の都市形態の変化も踏まえた一連の研究⁹⁾⁻¹¹⁾が挙げられる。しかしながら、これらの研究においても、本研究で扱う環境適応行動や環境調整行動は議論されていない。

また近世考古学の分野では、1975年の都立一橋高校地点の発掘¹²⁾を端緒に本格化していき、84年の東大構内遺跡の発掘調査¹³⁾、および86年の江戸遺跡情報連絡会（後に、江戸遺跡研究会に改称）によって活発化し、90年代以降も多くの研究がなされている。これらにより遺物研究の分野で、当時の江戸町人の食文化や服装など生活の実像が示されてきている。しかしながら、遺物より推定される日常の生活行動の中で、居住者の属性および一日の時間区分に関連させ

て検討することが可能な事項は食事の内容などに限られている。

一方、環境工学の分野でも、江戸時代後期から明治期における伝統的建築内の熱環境に着目した研究が、浦野ら（1987）¹⁴⁾などにより行われている。特に石田・荒谷ら（1990）¹⁵⁾は京都の複数の町家を対象に、居住者による中庭への撒水やスダレの設置といった環境調整行動に伴う屋内の熱環境の変化を実測し、居住者の滞在空間の時間変化の影響も合わせて検討することで、熱環境と居住者による環境調整行動との関係を分析している。しかしながら、この研究は屋内のみを対象としており、屋外の生活空間は対象としていない。加えて、複数の表長屋と裏長屋から構成される江戸の町屋敷と、通りに面する町家と裏の蔵が通り庭を介して配置された「鰻の寝床」と呼ばれる敷地が連続する京都の町屋敷では、空間形態が異なるだけでなく、形成にいたる歴史的背景も異なる。またこの研究は現代を対象にしており、本研究の分析とは異なっている。

3. 居住者の生活行動に関する必要な情報の設定

3.1 居住者の属性の設定

環境調整行動・環境適応行動の把握に先立ち、代表的な江戸町人の夏季における一日の生活行動を把握する必要があるが、その行動は職業と性別により異なっていたはずである。しかし江戸時代の社会では、男性と女性で職業が異なっているため、性別ごとに江戸町屋敷居住者の代表となる属性を検討する必要がある。尚、本研究では対象とする居住者を成人に限定し、子供や老人は対象外とする。

3.1-1 男性

玉井（1977）³⁾は、江戸の日本橋町人地を対象に、江戸時代後期における戸籍にほぼ対応する地代店賃勘定目録と、明治初年における戸籍に基づき、居住者の職種を商人、職人、雑（＝職人より下層の都市雑業層）の3つに分類している。吉田（1998）¹⁶⁾は、塚田の提唱する「身分的周縁」に着目し、町人を商人、日用、乞食・芸能者の3つに分類している。上記の分類の中で、職人と日用にそれぞれ挙げられている職種は類似していることから、本研究では江戸町人地の居住者を「商人」と「職人」の2つに分類した。また「雑」および「乞食・芸能者」に属する人々は、江戸町人の全体数に対しては少数かつ雑多な職業がひとまとめにされているため、本研究ではこのグループを扱わないこととした。『守貞謄稿』¹⁷⁾は、当時の江戸の風俗を知る上で「不可欠」^{注5)}と認識されている史料であるが、そこでは当時の職人に関して、大工・左官など屋外での作業を中心とする「出職」、および指物師・葛籠屋など屋内での作業を中心とする「居職」の2つに分類されると記述されている^{注6)}。双方ともに多くの職業を内包しているが、本研究で対象とする生活行動時の滞在空間に着目した場合には、出職と居職の違いは、仕事場が町屋敷の外部か内部かの違いに帰結している。そこで本研究では、当時の職人を「出職」と「居職」の2種類に分類することとした。

3.1-2 女性

当時の女性の職業は、銭湯・名所・岡場所で見られる湯女・看板娘・遊女など男性相手のサービス業や、女髪結などの特殊なものに限られ、多くの女性は職業に就かず家に居たとされている。そのため本研究では当時の女性の主要な生活行動に家事を設定した。また『守貞謄稿』¹⁷⁾には、当時の女性は未婚であっても二十歳を過ぎれば既婚として振る舞ったと記述されていることから^{注7)}、本研究では

既婚の成人女性のみを分析対象とした。既婚女性の夫となる男性の職業は上記の検討より商人と職人に分類されており、江戸時代の封建的な社会では夫の職業によって妻である女性の生活行動は異なっていたはずである。したがって、本研究では女性の属性として、「商人の妻」と「職人の妻」の2つを設定した。

以上より、江戸町屋敷での居住者の属性を、男性は「商人」・「職人（出職・居職）」、女性は「商人の妻」・「職人の妻」と設定した。

3.2 時間区分の設定

本研究では、当時の時間法である不定時法の時間区分^{注4)}ごとに居住者の主要な生活行動を把握した。また、各時間区分を当時と同じく、日中を明六ツ・朝五ツ・朝四ツ・昼九ツ・昼八ツ・昼七ツ、夜間を暮六ツ・夜五ツ・夜四ツ・暁九ツ・暁八ツ・暁七ツと呼称する。

本研究では、当時の人間が夏季と認識していた時期の中で最も暑い時期であり24節句の一つである「大暑」（旧暦^{注8)}6月15日）の前後7日を対象とした。対象期間における不定時法での1つの時間区分の長さを、『日本暦日原典』¹⁸⁾より算出し、日中を140分、夜間を100分と設定した（表2）^{注9)}。

表2 江戸時代後期の時間区分と夏季における定時法での時間

日中	江戸時代	明六ツ	朝五ツ	朝四ツ	昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ	単位時間区分
	現代	4:40 ~	7:00 ~	9:20 ~	11:40 ~	14:00 ~	16:20 ~	140分
夜間	江戸時代	暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ	暁九ツ	暁八ツ	暁七ツ	単位時間区分
	現代	18:40 ~	20:20 ~	22:00 ~	23:40 ~	1:20 ~	3:00 ~	100分

4. 町屋敷居住者の夏季生活行動の抽出を目的とした江戸と明治の両時代の史料の選定

環境調整行動のみならず、仕事や食事を含めた夏季一日における町屋敷居住者の日常の生活行動を把握する上で十分な情報量を確保するため、本章では江戸時代後期だけでなく明治期の史料にも着目し、作成目的や記載情報の精度を検討した上で史料を選定した。

4.1 明治時代の史料への着目

黄表紙や合巻などの書物が江戸町人に普及していたことは知られ

ているが、これら書物の執筆者は武士や裕福な商人が中心であったといえる。そのため市井の人間の日常的な生活行動を記載した史料は少なく、夏季に限定すると更に少なくなる。加えて当時の江戸は火事が頻発する環境にあり、現存する史料は非常に限られている。

一方、明治時代の史料には、幕末期に生まれ、江戸と明治の両時代の生活を記した史料が多く現存している。中には幕末生まれの古老たちが、座談会で旧江戸町人地における当時の生活を振り返った際の会話を記載したものも残されている。そこには明治時代になっても商家には江戸時代以来の徒弟制が残り、食生活や祭事も江戸時代と変わらず開催されていたことが記されている^{注10)}。

しかし、本研究は江戸の町屋敷に形成される夏季熱環境での町人の生活行動を対象としているため、明治時代の史料を用いるには、江戸町屋敷の空間形態と構成材料が変化していないことと、人々の生活様式が変化していないことを確認する必要がある。本章では、まずこれら上記の2点を確認して、用いることが可能な史料を特定した。その上で、続く第5章で江戸時代の史料と明治時代の史料から町屋敷居住者の生活行動を抽出した。

4.2 分析対象として明治時代の史料を用いることの妥当性の検討

4.2-1 夏季特有の生活様式の江戸と明治での変化

江戸時代後期から明治期にかけての生活行動や行事については、江戸または東京における行事を季節ごとに収録・解説した歳事記形式の史料が存在する。

江戸時代後期の歳事記として、当時の江戸に関する「年中行事及び遊観録を合したもの」^{注11)}と認識されている『東都歳事記』¹⁹⁾が挙げられる。本史料は、取りあげる事項が多岐に渡り、記述内容も詳細である。また明治期の出版物であるが、幕末期の江戸町人地生まれの筆者が当時の江戸での暮らしを回顧・作成した歳事記形式の史料として、『江戸府内繪本風俗往来』²⁰⁾が挙げられる。前章で江戸町人地の町屋敷居住者の代表的な属性を検討した際に用いた『守貞謄稿』¹⁷⁾は、日常の風俗に関する詳細な記述内容から、通常は随筆に分類されているが、各季節の行事を歳事記形式で記述した箇所（全34巻中、第27巻「夏冬」）も存在している。

表3 各時代の歳事記形式の史料にみる夏季特有の行事一覧

時代	史料名	対象年代	夏季特有の行事															夏季特有の生活行動				夏季の名物			夏季特有の職業						夏季特有の食べ物		
江戸時代	東都歳事記	江戸時代後期：天保9年（1838）	両国橋の夕涼	日海土参六月五朔月（富士詣で）	土用	天王祭	日参受寄権現千	四萬六千日	夏越の祓	七夕	草市	精霊祭	精霊棚	迎火	中元御祝儀	夕涼	納涼			紫草	螢	鵜飼	蓮	牽牛花	虫売	虫売	虫売	虫売	冷水売	心天	枇杷湯	枝豆	
	類型近世風俗史別名守貞謄稿	江戸時代後期：天保8年（1837）から嘉永6年（1853）	浅草川川開き	五月朔日（富士詣で）	五月晦日・六朔日	江戸牛頭天王祭・江戸山王祭		音指四萬六千日	江戸浅草親世詣	七夕・七夕踊				籠孟蘭盆盆灯	中元日	納涼			蚊遣火					牽牛花売	虫売	虫売	虫売	虫売	冷水売	心天売	枇杷葉湯売	湯出萩売	
	江戸府内繪本風俗往来	幕末期：※明治38年発行	両国川開き	富士詣で		祭山王祭・天王			名越の祓	七夕・井戸さ				七夕・井戸さ	七夕・井戸さ	七夕・井戸さ	七夕・井戸さ	七夕・井戸さ	蚊遣り	涼船	螢	蓮見	朝顔うり	蟬蛻売	定斎売	定斎売	定斎売	定斎売	風鈴や	冷や水	とうろてんや	蕎麦湯	枝豆うり
明治時代	東京風俗志	明治30年（1897）	両国の川開き	富士祭	土用	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	日枝神社の大祭	
	東京年中行事	明治43-44年（1910-1911）	両国川開	富士祭	土用	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	王祭・品川祭・山王祭	

（灰色部：史料内に記述がみられない）

明治時代の東京に関する歳事記として『東京風俗志』²¹⁾が挙げられる。同史料は明治30年の東京における人々の風俗を詳細に記述しており、庶民生活に関して「高い資料的価値を認められている」と認識されている^{注12)}。また「明治末期の、東京に於ける歳時風俗を伝えるに、この書の右に出るものなき」^{注13)}史料と認識されている『東京年中行事』²²⁾も、明治43年から44年における東京の夏季特有の行事を記述している。

そこで、江戸時代後期から明治時代の生活に関するこれら5つの史料を用いて、夏季の生活行動や行事に関する項目・記述を全て抽出した^{注14)}(表3)。抽出対象の季節については、当時の人々が夏のはじまりと認識していた旧暦5月28日の「大川の川開き」(＝隅田川での納涼花火大会)から、夏の終わりをつげる「盂蘭盆」の最終日旧暦7月16日までの期間を夏季と設定して、該当する項目や記述の抽出を行った。その上で、夏季特有の行事・生活行動・名物・季節限定の職業・季節限定の食べ物に分けて整理し、江戸時代後期と明治時代の違いをみた。行事に関しては、土用など一部の行事が江戸時代の史料に記載されていないが、史料を時代順に並べた場合、明治期においても全て維持されていることが確認された。また職業に関しては、蚊帳売り・植木売り・簾売りが明治時代の史料では際物師と括られていたなど項目の名称こそ違っていたが、記述内容が史料間でほぼ共通していた。この他の事項でも両時代を通して多くの項目が共通していた。よって、江戸町人地での夏季特有の生活行動に関して、江戸時代後期から明治40年代までは多くの共通性がみられるといえる。

4.2-2 江戸町屋敷の空間形態と構成材料の江戸と明治での変化

前記のように、明治時代の資料から江戸時代の生活を推定して本研究での解析に用いるためには、明治時代と江戸時代で空間構成や構成材料に変化がないことを確認する必要がある。そこで、両時代の史料内における町屋敷に関する記述と絵図を比較した。

明治時代より本格的に登場する回顧録形式の史料^{注15)}は、随筆的な体裁による庶民階層の日常生活に関する記述と、歳事記的な体裁による夏季特有の居住者の生活行動に関する記述を合わせ

表4 本報で扱う回顧録一覧

史料名	著者			回顧する年代	対象地区
	氏名	生年	生家		
(a) 明治の銀座職人話	浅野喜一郎	明治31年(1898)	葛籠屋	明治30年代後半～40年代	銀座弥左衛門町
(b) 煉瓦地	佐藤龍夫	明治31年(1898)	米屋		銀座錦屋町

表5 江戸町人地の町屋敷における空間形態と構成材料の江戸時代後期と明治期での比較
(a) 両時代でみる町屋敷の空間形態と構成材料の違い

区分	建物の種類	要素	江戸時代		明治時代		整合性
			特徴	番号(表5b)	特徴	番号(表5b)	
(A) 表坪	i) 表長屋	空間形態	格子窓(2階)	e-1	戸(2階)	m-1	×
		構成材料	土壁(2階の壁面)		煉瓦+漆喰塗り(2階壁面)		
			木製(格子窓)		漆喰塗り(2階の戸)		
	ii) 表通り	空間形態	木戸	e-2	木戸(表通りからの木戸)	m-11	○
		自身番所・番小屋	自身番所・番小屋		歩道(幅8間以上の通り)	m-3, m-4, m-5	×
			井戸		街路樹(柳・青桐)		
(B) 裏坪	i) 裏長屋	空間形態	五軒十軒が連なった長屋	e-3	煉瓦による舗装(人道)	m-2	×
		構成材料	乾燥裸地	e-2	舗装無し(車道)・乾燥裸地	m-3	×
	ii) 路次	空間形態	路地を中心に長屋が相対する	e-3	路次に沿って煉瓦長屋が建つ	m-7, m-8	○
		路次の中心に排水を流す溝	路次の中心に排水を流す溝	e-1, e-2	U字形の下水	m-10	△
			表通りと同一の構成材料		表通りと同一の構成材料	m-2	
	iii) 共用便所	空間形態	半戸(入り口)	e-4	半戸(入り口)	m-11	○
		板を渡す(足下)	板を渡す(足下)		2枚板を渡す(足下)	m-12	
			1～2戸(戸数)		江戸時代と同じ使用方法		
		構成材料	棧瓦葺きor柿葺き(屋根)	e-4	木造	m-11	△
	iv) その他	羽目板(壁面)	羽目板(壁面)		江戸時代と同じ使用方法	m-12	
		空間形態	敷地内に1つの共用井戸	e-3	敷地内に共用井戸	m-9	○
		構成材料	木造の樫(共用井戸)	e-2	江戸時代と同じ使用方法	m-11	△

○: 江戸時代と明治時代で一致。×: 江戸時代の情報と対応しない。△: 明治時代の情報より江戸時代と一致していると判断

(b) 出典一覧

出典番号	史料名	時代	史料内の記述・絵図	対応部
e-1	守貞謄稿	江戸	二階造りの宅も底上を塗り籠めず、皆必ず格子を専らとす。中二階には無格子・無窓にて土壁するもあり。 	表長屋
e-2	守貞謄稿	江戸	江戸市街は、路上に木戸・自身番所・番小屋・井戸等これあり。 	表通り
e-3	江戸繁昌記三篇	江戸	八百八街、背坊新道を連ねて、從街曲折並に裏店を建つ。五家一軒、十倉一梁。劇なる裏店に至りては、五と十とを結びて一部と為す。牙房相対し、中間に道を通す。之を路次と謂ふ。一井汲を同くし、数便所を同くす。一區を画して糞を収め、一渠溝を開いて糞を流す。慶弔相通じ、出入門を共にす。一門百の不慮に備ふ。里歌に所謂路次六限、例して西牌を越ひて鐘を上す。備積工商、紛雜賈居す。炊飯の煙、朝来雲凝り、鼓櫓の聲、晚間雷轟く。爰に一裏店を写して、略々其の一端を示す。万の裏店推す可し。 	裏長屋・下水木樋・木戸
e-4	守貞謄稿	江戸	長屋と号して一字数戸の小民の借家には毎戸に間を造らず二戸を造て数戸の兼用とする也(略)江戸の惣こうかはさん瓦ふき或はこけらふき周羽目板壁無床にて戸も半戸也。戸にはひじつと云鉄具用ひず細き一材を載せて是を巡らし戸を之に打つ(略)惣間には左右に板を架すのみ 	共同便所
m-1	明治の銀座職人話	明治	私の家はいわゆる三等煉瓦家屋であつたが、煉瓦家屋とは云え、煉瓦家屋に準ずる木造漆喰造りの長屋建てで、(略)壁を厚く塗り、戸も防火用の塗り戸で、(略)このような仕様は表建てで、裏側になると往時そのままの木造であつた。 	表長屋
m-2	明治の銀座職人話	明治	道路は舗装されていないので、天気の良い風の強い日は(略)砂埃が舞い上がった。車道には馬糞と草鞋の切れはしとがあちこちに見られ、是が風に煽られて人を包み、店先にははいり込んで来た。(略)雨が降ると路傍に一面水溜まりができて(略) 	表通り
m-3	煉瓦地	明治	煉瓦を以て舗装したのは人道だけで、車道はかまぼこ型に中央の盛り上ったむき出しの地面であつた。(略)街路樹は勿論その頃はもう松、櫻の時代ではなく、例の榎であつた。 	表通り・街路樹
m-4	明治の銀座職人話	明治	人道には柳の並木があり(略) 	街路樹
m-5	煉瓦地	明治	さて此の仕事場の前の往来には始めに云つたやうに青桐の木が並んでいた 	街路樹
m-6	明治の銀座職人話	明治	この横丁を入つた裏通りは粗末な長屋があり、さもない渡世の人びとが住み着いていた。 	裏長屋
m-7	明治の銀座職人話	明治	路地に沿って平屋建の九尺二間の棟割長屋が立てこんでいて、(略) 	裏長屋
m-8	煉瓦地	明治	当時の下町一帯はあらゆる町内の内部に網の目のやうな路地板裏が縦横無尽に、而も驚く可き不規則さを以て走っていた。 	路次
m-9	煉瓦地	明治	一步其の内部、つまり長方形の核心へ足を踏み入れると、それは実に江戸以来落語でおなじみの裏長屋と路地の世界、たたき大工と願人坊主の天下、どぶ板と惣後架と井戸端会議の王国であつたのである。 	下水木樋
m-10	明治の銀座職人話	明治	下水道も煉瓦通りこそ洋式下水道であつたが、裏通りでは舊来のU字形の下水であつた。 	下水木樋
m-11	明治の銀座職人話	明治	木戸番といい、共同便所の使い方がいい、江戸時代の封建的な仕来りがあり、明治の代にも通用していたわけである。 	木戸・共同便所
m-12	明治の銀座職人話	明治	掘建て小屋の片側に丸い土瓶を埋けただけのが男性用で、女性用は土瓶の上に横に二枚板を渡しただけのもので、戸締まりときたら実に埒もなく、丸太棒に戸板の半分くらいものを取り付けただけであつた。 	共同便所

持っている。本報では、執筆者が旧江戸町人地の出身者であり、本研究対象地の守山町と同じ銀座地区^{注16)}について当時（明治30年代後半から40年代）の町並みの様子を記述した回顧録を取り上げた（表4）。これら2つの回顧録は、双方の執筆者の生家が職人の家と商人の家で社会階層が異なるにもかかわらず、誕生年が同じで互いに隣接する町に居住していたため、両史料内における建物の名称、外観、各通りの特徴に関する記述に多くの共通点がみられる。これらの事項は同時期の京橋地区の地図からも確認可能であることから、本研究で着目する町屋敷内における居住者の生活行動に関する情報の抽出に際して、客観性を確保できると判断した。

この2つの回顧録における旧江戸町人地の町屋敷に関する記述と、本研究1報目において町屋敷内の建物配置を検討した際に使用した江戸時代後期の史料『江戸繁昌記』²³⁾および『守貞謄稿』¹⁷⁾内の江戸町屋敷に関する記述及び絵図とを抽出し、比較した（表5）。

表5(a)において江戸時代後期と明治時代の間での旧江戸町人地の町屋敷の空間形態と構成材料の変化を検討した結果、江戸時代後期と明治40年代では、旧江戸町人地の町屋敷の表坪^{注17)}と表通りに関して、表長屋の蔵造り化、表通りの拡張、柳などの街路樹の植樹など変化がみられた。一方、町屋敷の裏坪^{注17)}に関しては、裏長屋、路次、路次の中央に設置された下水木樋、惣後架（共用便所）の空間形態と構成材料に関してはほぼ変化がないことがわかった。

そこで本研究では、江戸町人地の町屋敷の裏坪に限定すれば、明治時代の史料より町屋敷居住者の夏季の生活行動に関する情報を抽出できるものとして分析を行う。

4.3 本研究で用いる史料

江戸時代後期から明治時代における江戸および東京に関する史料の中で、町屋敷における居住者の夏季および通年の一日の生活行動に関する情報を記載している史料を選定した^{注18)}（表6）。

（1）随筆形式の史料

江戸時代後期における江戸の風俗を詳細に記述する随筆形式の史料として、前章および前節における考察で用いた『守貞謄稿』¹⁷⁾が挙げられる。本史料は、江戸町人地で暮らし著者が一般的と判断した当時の江戸町人の夏季における日常の生活行動を、「七夕」や「盂蘭盆」の項目で記述している。

また、同じく随筆形式の当時の史料として『江戸繁昌記』²³⁾が挙げられる。本史料は当時の江戸の様子を詳細に記述し過ぎたため、風紀を乱すとして天保の改革で幕府に取り締められて発禁処分となったものである。ここでは、町屋敷内における人々の暮らしを「裏店」と「湯屋」の項目で記述している。

（2）歳事記形式の史料

前節における考察で使用了江戸時代後期および明治時代における歳事記形式の史料の中で、江戸時代後期の歳事記である『東都歳事記』¹⁹⁾では、表長屋の住民の夏季の生活行動に関しては、「夕涼み」、「牽牛花」の項目で記述している。し

かしながら、町屋敷の裏坪における居住者の暮らしに関する記述はほとんどみられない。一方、幕末期の歳事記である『江戸府内繪本風俗往来』²⁰⁾は、「午睡」、「打ち水」、「蚊遣り」、「夕涼み」の項目において、町屋敷の表坪と裏坪の両方における居住者の生活行動を記述している。

明治期の歳事記である『東京風俗志』²¹⁾は、「年中行事」の章以外に「住居」や「飲食」に関する章を設け、そこで明治30年の東京における旧江戸町屋敷の裏坪での居住者の夏季の生活行動を記述している。一方、同じく明治期の歳事記である『東京年中行事』²²⁾は、「滝浴み」、「蓮」、「夕納涼」、「両国川開」の項目において明治43年・44年の東京における夏季の納涼の様子を記述しているが、すべて町屋敷の外における人々の生活行動に関する記述である。

（3）外国人による見聞録

江戸時代後期および明治期に日本を訪れた外国人による当時の日本に関する見聞録には、当時の日本人の生活が記述されている。

江戸時代後期の江戸を記述した見聞録として、ロバート・フォーチュンの『幕末日本探訪記 - 江戸と北京』²⁴⁾が挙げられる。本書には町人地の一部の表通り、江戸近郊の名所、武士の所有する建物における人々の暮らしに関する記述は存在するが、本研究で対象とする江戸町屋敷における居住者の生活に関する記述は存在しない。

また、明治期における東京の様子を記述した見聞録として小泉八雲の『日本瞥見記』²⁵⁾やエドワード・S・モースの『日本その日その日』²⁶⁾が挙げられる。しかしながら上記江戸時代後期の見聞録と同様、町屋敷における居住者の生活行動に関する記述はみられない。

表6 江戸町人地の町屋敷居住者の生活行動に関する記載の有無

時代	史料名	著者／編者	史料形式	史料の対象年代	史料内の情報		選定理由	使用可否
					記述	絵図		
江戸時代	江戸繁昌記	寺門静軒	随筆	江戸時代後期	○	—	江戸時代後期における江戸町人地の風俗を詳細に記述	○
	守貞謄稿	喜多川守貞	随筆	江戸時代後期	○	○	江戸町人地の風俗を知る上で「不可欠」と認識される史料	○
	東都歳事記	斉藤月岑	歳事記	江戸時代後期	○	×	当時における江戸の祭事を地域毎に詳細に記述・ただし町屋敷に関する記述は少ない	×
	江戸府内繪本風俗往来	菊池喜一郎	歳事記	幕末期	○	○	幕末期生まれの著者が自らの経験を回顧し、記述	○
	幕末日本探訪記 - 江戸と北京	ロバート・フォーチュン	見聞録	幕末期	×	×	町屋敷に関する記述がない	×
明治時代	開花写真鏡 - 写真にみる幕末から明治へ	石黒敬七コレクション保存会	古写真	幕末期～明治時代	×	×	町屋敷に関する古写真がない	×
	イラストレイテッド・ロンドン・ニュース	チャールズ・ワグマン他	彩色図版	幕末期～明治時代	×	×	町屋敷に関する絵図がない	×
	日本その日その日	エドワード・S・モース	見聞録	明治時代前～中期	×	×	町屋敷に関する記述がない	×
	日本瞥見記	小泉八雲	見聞録	明治時代中期	×	×	町屋敷に関する記述がない	×
	東京風俗志	平出鏗二郎	歳事記	明治時代後期	○	○	当時の東京における庶民生活に関して資料的価値が認められている	○
	東京年中行事	若月紫蘭	歳事記	明治時代末期	○	○	明治末期の東京の祭事風俗を伝えている・旧江戸町屋敷に関する記述は少ない	×
	煉瓦地	佐藤龍夫	回顧録	明治時代末期	○	○	1) 著者は旧江戸町人地で成長、2) 自らの経験を記述、3) 江戸時代と比較し、町屋敷裏坪の空間形態に大きな変化が見られない	○
	明治の銀座職人話	浅野喜一郎	回顧録	明治時代末期	○	—		○

（○：対象として選定、×：対象としない、—：存在しない）

(4) 古写真・彩色図版

江戸時代後期および幕末期に江戸を撮影した古写真は非常に少ない。しかし明治期に入ると写真機の発達と共に史料数が飛躍的に多くなる。石黒敬七・敬章、両氏のコレクション²⁷⁾は幕末から明治期にかけて撮影された古写真の収蔵量で有名である。しかし、旧江戸町人地における町屋敷内の様子を写した古写真は確認されていない。

また幕末から明治時代にかけて日本を訪れた海外の新聞の通信員が日本国内の風景を詳細に描いた絵図を元に作成した彩色図版²⁸⁾注¹⁹⁾にも当時の江戸および東京の町並みが描かれているが、町屋敷内部を描いた作品は確認されなかった。

(5) 回顧録形式の史料

局地的な情報が記載されやすい回顧録の特性を考慮し、本研究では対象地である守山町周辺に限定して回顧録形式の史料を検討する。前節でも使用した銀座地区の回顧録(表4)を選定した。『明治の銀座職人話』²⁹⁾では、「わが家の近辺」、「棟割長屋」、「渡り職人の梅さん」、「小田兼さん」の項目で、『煉瓦地』³⁰⁾では、「鎗屋町の家」、「仕事場」、「路次拔裏」、「行商人」の項目で、それぞれ旧江戸町人地の町屋敷内における居住者の生活行動に関する記述がみられる。

5. 夏季一日における居住者の滞在空間と環境調整行動

本章では、対象地における居住者の生活空間の範囲を設定した上で、前章で選定した史料より夏季一日における居住者の生活行動を整理した。更にそれを元に、居住者の滞在空間と環境調整行動の内容とその変化を把握した。

5.1 江戸町屋敷の居住者の生活空間の設定

居住者による生活行動に関する情報には多くの場合、その生活行動が行われた空間に関する情報も内包されている。生活行動に関する情報を抽出するにあたり、居住者の生活行動が行われる生活空間の範囲を本研究対象地である守山町を対象に設定した。

玉井(1977)³⁾は江戸町屋敷内の建物の配置計画が類型化可能であることを示している。本研究ではこの研究に基づき、本研究対象地である守山町的生活空間を屋内(表長屋・裏長屋)・路次・共用設備(共用井戸・惣後架・ごみ溜の周辺)・表通り(表長屋の店先の歩行者空間)・その他(町屋敷以外)の5つに分類した(図1)。これらの生活空間の中で、ある時間区分に生活行動が行われていた場合、その生活空間を居住者の滞在空間と設定した。なお、商人とその妻は表長屋、職人とその妻は裏長屋の屋内を生活空間としていたと設定した。

5.2 町屋敷居住者による夏季一日の生活行動と滞在空間の把握

前章で選定した史料より居住者の生活行動に関する文章を抽出した。そこから祭事など特定日の行事を除き、日常行われている生活行動に限定し、仕事も娯楽も合わせて選択した。行動内容が複数の史料で確認されたものを整理した結果、「朝の身支度」「風呂」「食事」「午睡」「仕事」「散髪」「行水」「納涼」「夕涼み」「寄席」「就寝」の計11の生活行動が抽出された。これらについて時間区分の順に並べ、行動主体である居住者の属性、時間区分、滞在空間を特定した。なお、抽出する情報より同一の時間区分内で複数の生活空間が対象となる場合は、これらすべての生活空間を滞在空間とみなした。また時間区分「朝五ツ」・「朝四ツ」は、ひと続きの生活行動がみられたため、2つの時間区分はまとめて扱うこととした。

対象地

□ : 京橋地区守山町

屋外生活空間

⋯ : 路次
⋯ : 表通り(歩行者空間)
⋯ : 共用設備

建物の種類

■ : 裏長屋
■ : 表長屋
■ : 土蔵

江戸町屋敷図(1807)より作成

図1 本研究対象地における生活空間の分類

(1) 朝の身支度

『江戸府内繪本風俗往来』²⁰⁾に「夏の短か夜(略)先起出づるや井戸端の繁昌人絶ゆることなきは水を汲みて顔を洗ひぬぶき眼を覚まさんとたらひを携来りて顔を洗ふあり」とあり、夜明けの明六ツに町屋敷居住者が起床し、共用井戸で洗顔していたことがわかるため、この時間にすべての属性が身支度をしと設定した。その際、共用井戸周辺の共用空間だけでなく、表長屋・裏長屋から共用井戸に通じる路次も滞在空間となる。

(2) 風呂

『江戸繁昌記』²³⁾内の「湯屋」の項目で、江戸町人地の男性が「暁天猶は昏し、早く鶉声に和して戸を連打し去る。(略)高声急に呼びて曰はく、「天明けたり、須らく起くべし、伴頭。」「疾く開けよ、伴頭。」と、夜明けに湯屋(=風呂屋)の前に集合し、番頭に開店を迫っており、夜明けの明六ツに男性が湯屋へ行ったことがよみとれる。また同史料に「混雑朝を崇へ、飄風漸く止む。暫時客罕なり。伴頭始めて朝食に就く。既にして女湯も亦発す。」とあり、男性が湯に入った後かつ朝食後の朝五ツ・朝四ツにおいて、今度は女性が湯屋へ行ったことがわかる。再び同史料に「晩に際して混雑復た沸く」および「既にして柝甲夜を報ず。爨奴早く槽底に向つて柄を脱す。数客闖入す。伴頭急に止めて曰はく、「既に巳に漏せり」と。」とあり、夕方の昼七ツにすべての属性の居住者が湯屋へ行ったこと、および日没時には湯屋が閉店したことがわかる。よって男性の属性は明六ツと昼七ツに、女性の属性は朝五ツ・朝四ツ・昼七ツに風呂に入ると設定した。当時江戸では非常に多くの湯屋が存在していた注²⁰⁾ことから、本研究でも対象町屋敷の近くに湯屋が存在すると設定し、滞在空間を町屋敷外とした。

(3) 食事

当時の典型的な職人について、『明治の銀座職人話』²⁹⁾に「仕事振りは夜明けと共に仕事に取り掛かり、私の起きる頃には、もう一仕事して、(略)酒屋で朝酒一杯ひっかけてから朝飯だ。それも立ち膝で手早くかつ込み、すぐに仕事場へ戻る」という記述から、居職は夜明けの明六ツに仕事し、その後の時間区分である朝五ツに町屋敷外の酒屋と自宅(屋内)に滞在したことがわかる。一方、『東京風俗志』²¹⁾に「斯くの如く朝来、納豆売も、煮豆屋・佃煮屋も町々を売りありき、(略)三度の惣菜も坐ながらに調え得べく、近所の仕出し屋に頼みても三度の食に事欠かず。」とあり、居職以外の属性の居

住者は、夜明けの明六ツに食事をとったこと、および一日に3回食事の時間を設けたことがよみとれる。また夕食は、『江戸府内繪本風俗往来』²⁰⁾に「日暮には家業を止め（略）此人々浴湯をすませ夕飯又一酒を傾け」とあり、すべての属性の居住者が夕方の昼七ツにとったと理解する。よって、明六ツ・昼七ツ・朝夕の間である正午の昼九ツにすべての属性が食事をとったと判断した。また『煉瓦地』³⁰⁾に裏長屋の居住者について「何にしる主人公の多くは昼間居ない」とあり、出職は日中町屋敷内に滞在せず、昼食は町屋敷外の仕事先でとることがよみとれる。これと上記の文章より昼食・夕食時における出職以外の属性の滞在空間は各属性の自宅(屋内)と設定した。

(4) 午睡

『江戸府内繪本風俗往来』²⁰⁾に「眞夏の頃は午飯終るや睡気頻りに催し市中道路の往来も日光のつよきに耐へかねて一時は絶えて止みぬるまま自然近隣何等の響きも聞へず諸職人は午飯休の肱枕諸商店は算盤にもたれる手代あれば硯箱へ肱をつきたる老番頭も見へ船漕よする小僧さんあり勝手の方に女中方思ひ思ひの忍眠り奥にて子供を寝しながら母親さへもへの字の形去れば此時いづれも同じ鼾睡の声（略）」とあり、『煉瓦地』²⁰⁾にも昼食後に居住者が午睡したという記述がみられることから、すべての属性の居住者が昼食後に午睡したものとした。この午睡は昼食後の生活行動であることから、各属性とも昼食時と同じ滞在空間に同定した。

(5) 仕事

『明治の銀座職人話』²⁹⁾に、江戸時代生まれの居職について「昔の職人は日の出とともに起きて一人前の仕事をいかに早く切り上げるかが腕自慢だった。」とあり、居職のみ明六ツより自宅（裏長屋）屋内で仕事を始めることがよみとれる。朝の身支度に関する考察も含め、居職以外の属性は朝食や朝の身支度を終えた後の朝五ツより仕事を開始すると理解した。『煉瓦地』³⁰⁾に、出職に関して「何にしる主人公の多くは昼間居ない」とあり、日中町屋敷に居なかったことがわかる。上記居職に関する記述と、商人は職業上、自宅（表長屋）屋内で作業していたことも合わせ、仕事時には居職と商人は自宅を、出職は町屋敷外を滞在空間としていると判断した。

商人の妻に関して、『東京風俗志』²¹⁾に「昼は容儀を整い、長火鉢のそばにお上さん然として澄まし込み、近辺に出づるにも必ず衣服を更めて出づるが如きたまにて、日を暮らし、夜に至れば倉皇、手襷がけとなりて洗濯もすれば夜作もする、米屋、八百屋に買物に出づるという有様にて、昼は細君、夜は宛然下婢たり。」とあり、日中は自宅（表長屋）屋内に滞在し、日暮れの昼七ツ以降に、家事のため屋外の共用設備、特に共用井戸周辺に滞在したことがわかる。職人の妻に関して、『東京風俗志』²¹⁾に「裏町辺にては、朝に口を漱ぐにも、米を磨ぐにも、さては衣服の洗い濯ぎにも、ここに来りてするなれば、口やかましきお三どんや、お上さんの自ら相集まりて、喃々喋々（ぺちやりくちやり）と迭みに評し、」とあり、『煉瓦地』³⁰⁾にも「長雨の後のよく晴れた午前中などは此の井戸端（略）が仲々に賑はった」とあることから、朝食後から昼食までの朝五ツと朝四ツに、共用井戸周辺で作業したことがよみとれる。よって職人の妻は自宅（裏長屋）と共用設備を滞在空間としたと判断した。

昼食後から夕食をとる昼七ツまでの時間区分において、本研究で対象とする史料内には、仕事に関する具体的な記述はみられない。『明治の銀座職人話』²⁹⁾で職人について「職人の家庭で育ったから、

（略）座敷は寝るのと飯を喰う場所で、寝る時以外はまるで高麗鼠のように四六時中働いていた」、および「陽の長い夏場などは、四時頃までには三人前の仕事をきちんと仕上げてしまった」とあること、前項の「午睡」での検討、および上記の午前中の商人の妻と職人の妻の仕事時間での検討を踏まえ、昼八ツにおいて、男性居住者が仕事を再開し、女性は屋内に滞在したと判断した。

日暮れ（昼七ツ）以降から夜（暮六ツ）までに關しては、詳細は後述の「納涼」の項で記述したが、『江戸府内繪本風俗往来』²⁰⁾に「町内両側の店皆日暮には家業を止め」とあり、男性は夕暮れの「昼七ツ」に終業したと理解できる。一方、『明治の銀座職人話』²⁹⁾に「祖母の話」^{注21)}では、夜は行燈の燈芯一本の明かりで過ごし、夜なべ仕事があると燈芯を一本ふやして二本にして明かりをとったと云う」とあり、商人の妻と職人の妻は日没後の暮六ツにおいても、表長屋・裏長屋の屋内で仕事をしたことがわかる。

(6) 散髪

居職の生活について、『明治の銀座職人話』²⁹⁾に「夕方手拭を引っ掛けて八丁堀へ毎日のように出掛けて、湯屋と床屋と一杯屋を欠かさなかった。」および、「頭と顔を気にして床屋へ始終行った」とあり、彼らが毎日夕方（昼七ツ）に散髪したことがよみとれる。床屋（＝髪結床と呼称）は湯屋と同様に江戸に数多く存在していたことから^{注22)}、居職は町屋敷外の髪結床に滞在したと判断した。

(7) 行水

路次の風景として『明治の銀座職人話』²⁹⁾に「夏の頃ともなると、戸や障子を開け放し、（略）女房などが浴衣の肩をはずして濡れ手拭を肩から掛けて涼をとっている姿や、陽の暮れるころ、雨戸で囲って行水しているさまも見えたものだ。」とあり、裏長屋の居住者である職人（出職・居職）と職人の妻は、夕方の昼七ツに路次で行水していたことがわかる。

(8) 納涼（路次・表通りの縁台に座る）

『江戸府内繪本風俗往来』²⁰⁾に「町内両側の店皆日暮には家業を止め板戸を少し卸し店先より往来一面大地やり水に潤い家毎に涼台を出し煙草盆団扇を出し家々の主人を始め子供より妻など涼台に腰打かけて納涼する（略）此人々浴湯をすませ夕飯又一酒を傾け洗ひし浴衣打はおり団扇と煙草を持てゆるゆる白昼の炎熱を払うなり」とあり、表長屋の居住者の商人と商人の妻は表通り、特に縁台周辺で納涼したことがよみとれる。また同史料に「此又宵の口にて止みけること毎夜なり」とあり、この納涼が毎日暮六ツになる前の昼七ツに終了したことがわかる。

一方、裏長屋の居住者である職人と職人の妻に関しては、『明治の銀座職人話』²⁹⁾の路地裏に関連した言及で「夏の夕暮れになると、各家では青竹縁台に浴衣姿で涼を楽しんだものである」とあり、こちらも夕暮れの昼七ツに路次の縁台周辺で納涼することがわかる。

(9) 夕涼み（表通りの散策）

『東京風俗志』²¹⁾に「夏の夕、涼がてらに、漫步（そぞろあるき）する客の多かる頃には、路傍の床几などしつらい、茹赤小豆、醃酒（あまぎけ）などを売る店多く出づ、或は氷水屋の兼るもあり。」とあり、町屋敷のすべての属性が納涼に引き続き表通りをそぞろ歩くことがよみとれる。また『江戸府内繪本風俗往来』²⁰⁾に「夏の夜麦湯店の出る所江戸市中諸所にありたり（略）茶代多からずして涼風余あるより客絶ゆることなし夜たけるまで店を出したり」とあり、

このそぞろ歩きは、日没後の夜（暮六ツ）の間中、人々が寝る直前まで続いたことがわかる。

(10) 寄席

寄席の興行について、『東京風俗志』²¹⁾に「夜を主とすれども、(略)因ってまた昼席・夜席の名あり。(略)而して興行時間は、日出より午後十二時までの間とし、一興行は七時間以内を限りとせり。」とあり、夜間が主流で、夕方（昼七ツ）から夜（暮六ツ）までの間に興行することがわかる。また『江戸繁昌記』²³⁾内の「寄」の項目で、「新道の外妾、代地の隠居、晩冬や手代や、男女雑居し、老少位を同じうす。」とあり、すべての属性が寄席を楽しんだことがわかる。同史料に寄席の会場が「大概ね一坊一所」と江戸町人地に点在したとあることから、町屋敷外を滞在空間としたと判断した。

(11) 就寝（睡眠）

『煉瓦地』³⁰⁾に「米屋の事だから夜の商売は無いし、(略)店の者も九時過には寝る事が出来た」とあり、表長屋の居住者は、夜五ツに就寝したことがわかる。本研究では残りの属性も夜五ツに就寝し、以降より暁七ツまですべての属性の居住者が睡眠すると判断した。

以上、限られた史料から明らかとなった情報であるが、夏季一日における江戸町人地の町屋敷居住者の生活行動を把握した（表7）。更に各生活行動が行われた空間と前節で設定した居住者の生活空間とを対応させ、夏季一日における居住者の滞在空間も把握した（表8）。これにより出職以外の属性の居住者は一日の多くを屋内で過ごしたことが、表通りには夕方（昼七ツ）から日没後の暮六ツにかけてすべての居住者が滞在したこと、路次には夜が明ける明六つと夕方（昼七ツ）に裏長屋に住む職人と職人の妻が滞在したことが示された。

表7 夏季一日における各属性の町屋敷居住者の生活行動

居住者の属性	明六ツ	朝五ツ	朝四ツ	昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ	暮六ツ	夜五ツ～
	4:40～	7:00～	9:20～	11:40～	14:00～	16:20～	18:40～	20:20～
A) 商人	食事／身支度／風呂	仕事	仕事	食事／午睡	仕事	納涼／食事／風呂／寄席	夕涼み／寄席	睡眠
B) 商人の妻	仕事／食事／身支度	仕事／風呂	仕事／風呂	仕事／食事／午睡	仕事	仕事／納涼／食事／風呂／寄席	仕事／夕涼み／寄席	睡眠
C) 居職	仕事／身支度／風呂	食事／仕事	仕事	食事／午睡	仕事	納涼／食事／風呂／行水／散髪／寄席	夕涼み／寄席	睡眠
D) 出職	食事／身支度／風呂	仕事	仕事	食事／午睡	仕事	納涼／食事／風呂／行水／寄席	夕涼み／寄席	睡眠
E) 職人の妻	仕事／食事／身支度	仕事／風呂	仕事／風呂	仕事／食事／午睡	仕事	仕事／納涼／食事／風呂／行水／寄席	仕事／夕涼み／寄席	睡眠

表8 夏季一日に江戸町屋敷の生活空間に滞在する居住者の属性

生活空間		明六ツ	朝五ツ	朝四ツ	昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ	暮六ツ	夜五ツ～
		4:40～	7:00～	9:20～	11:40～	14:00～	16:20～	18:40～	20:20～
町屋敷内	屋内（表長屋＋裏長屋）	A, B, C, D, E	A, B, D	A, B, D	A, B, D, E	A, B, D, E	A, B, C, D, E	B, E	A, B, C, D, E
	路次	C, D, E	E	E	—	—	C, D, E ※2)	—	—
	共用設備 ※1)	A, B, C, D, E	E	E	—	—	B, E	—	—
町屋敷外	表通り	—	—	—	—	—	A, B, C, D, E ※2)	A, B, C, D, E ※2)	—
	町屋敷外	A, C, D	B, C, D, E	B, C, D, E	C	C	A, B, C, D, E	A, B, C, D, E	—

居住者の属性： A（商人）、B（商人の妻）、C（出職）、D（居職）、E（職人の妻）

※1) 共用井戸周辺を局所的な滞在空間とする。 ※2) 縁台周辺を局所的な滞在空間とする。 —：なし

5.3 町屋敷居住者による夏季一日の環境調整行動の把握

前節と同様に選定した史料に対して夏季の江戸町屋敷での居住者の環境調整行動に関連する史料内の記述を抜き出して行動内容が複数の史料で確認されたものを整理した結果、「縁台の設置」、「打ち水」、「開口部の開閉」の計3つの生活行動が抽出された。この3つについて、行動の主体・場所・時間区分を把握した。

5.3-1 縁台の設置

(1) 表通り

『江戸府内繪本風俗往来』²⁰⁾より「町内両側の店皆日暮には家業を止め板戸を少し卸し店先より往来一面大地やり水に潤ひ家毎に涼台を出し煙草盆団扇を出し家々の主人を始め子供より妻など涼台に腰打かけて納涼する」とあり、日が暮れ始める昼七ツの時間区分に、納涼のために、表長屋の居住者である商人と商人の妻が、縁台（上記文書内では涼台）を設置したことがよみとれる。

また、『煉瓦地』³⁰⁾に、筆者の暮らした表長屋に関して「仕事場の前の往来には（略）青桐の木が並んでいたが、その下は夏の夕方には若い衆達の好い涼み場であった。幅の広い大きな縁台二つあって、それを持ち出しては彼等は将棋や馬鹿話に楽しい宵を過ごすのであった」とあり、縁台の設置場所は表長屋の店先の表通りとわかる。

(2) 路次

『明治の銀座職人話』²⁹⁾に、旧江戸町人地の路地裏に関して「夏の夕暮れになると、各家では青竹縁台に浴衣姿で涼を楽しんだものである」とあり、表通りと同じく夕方（昼七ツ）の時間区分に、裏長屋の居住者である職人と職人の妻が、路次内に青竹製の縁台を設置したことがよみとれる。しかし、これら縁台の路次内における設置

場所に関しては選定した史料内には記述はみられなかった。本研究では、表長屋の居住者が表長屋の店先に縁台を設置した事と、裏長屋は路次以外に屋外生活空間に面していなかったことを踏まえ、裏長屋の面する路次を縁台の設置場所とした。

5.3-2 打ち水（撒水）

(1) 日中の打ち水

『江戸府内繪本風俗往来』²⁰⁾に「日々炎熱焼が如く六月大暑前後（略）町々又撒水絶間なきも其の甲斐なく所謂焼石に水の譬にそむかず暑気減ずること少しもなき」とあり、『明治の銀座職人話』²⁹⁾には「下足番が店先に程よく打ち水をしていたのをよく見掛けた」とある。日中、仕事をする時間区分に、表長屋の居住者である商人と商人の妻が、表通りの埃の飛散の防止を目的に、店先の表通りに撒水していたことがわかる。

(2) 夕方（暮六ツ）の打ち水（表通り）

上記同史料に「町内両側の店皆日暮には家業を止め板戸を少し卸し店先より往来一面大地やり水に潤ひ家毎に涼台を出し煙草盆団扇を出し家々の主人を始め子供より妻など涼台に腰打かけて納涼する」とあり、日の暮れはじめる昼七ツの時間区分において、商人と商人の妻が、納涼を目的に、表通りへ撒水していたことがよみとれる。

(3) 夕方の打ち水（路次）

明治時代の回顧録『煉瓦地』³⁰⁾には、裏長屋に関して「家の造りも略々一定の規格を持っていた。即格子戸又は油障子のほった出入の土間と、竹の棧をうち付けた茶の間の出窓（それへ朝顔の蔭等這はした風流なものもある）が九尺開口に窮屈さうに押し並んでいる」とあり、人々が路次内の1階開口部の横の窓の下に植木鉢を設置していたことがよみとれる。植木鉢が存在する以上、水を与える必要があり、前節において裏長屋の居住者は昼七ツに路次で行水していたことが明らかとなったことも考慮すると、植木鉢への水やりの際に路次に撒水していた可能性が考えられた。しかしながら、本研究で選定した史料には、裏長屋の居住者による打ち水に関する具体的な記述はみられなかったため、本研究内では路次に撒水（打ち水）は行われないものと設定した。

5.3-3 開口部の開閉

(1) 表長屋の開口部

『東京風俗志』²¹⁾に「店を開きたるは上げ戸を用い、昼は檐裏（のきうら）（都俗に葎（しとみ）という）に上げ、夜に至りて下ろす、何れも南蛮ざるなどを用いて固く鎖さず。」とあり、表長屋の居住者が朝の開店時から仕事をする時間区分の間は開口部を開放したことがわかる。『江戸府内繪本風俗往来』²⁰⁾には「町内両側の店皆日暮には家業を止め板戸を少し卸し」とあり、閉店時の日暮れには葎戸を設置し、開口部を閉ざしたことがよみとれる。なお、本研究1報目²⁾の検討で、日中の表長屋開口部には暖簾が設置されていたことが明らかとなっている。

(2) 裏長屋の開口部

『江戸府内繪本風俗往来』²⁰⁾には裏長屋の開口部の開放に関する直接的な記述は見られなかったが、同史料内の蚊遣りの様子を示す絵図は、夏季の夕方に建物開口部を開放し、そこにスダレを設置する様子が描かれている。一方、『明治の銀座職人話』²⁹⁾では「夏の頃ともなると、戸や障子を明け放し、（略）女房などが浴衣の肩をはずして濡れ手拭を肩から掛けて涼をとっている姿や、陽の暮れるころ、雨戸で囲って行水しているさまも見えたものだ。」とあり、夏季の日中に建物開口部を開放していたと理解できる。一方、江戸の建物については『守貞謄稿』¹⁷⁾に「今世（＝天保期）は必ず雨戸あり。」とあり、居住者が雨戸を使用していたことがわかる。前節での検討

から裏長屋の居住者は夜が明ける明六ツから活動を開始したことが明らかとなっているので、本研究ではそこから日の暮れる昼七ツまで開口部を開放してスダレを設置し、残りの時間区分の暮六ツから暁七ツまでの間は、開口部に雨戸を設置したと同定した。

以上、限られた史料の中、更に条件付けした範囲で明らかとなる情報から夏季一日の各時間区分における居住者の環境調整行動を把握した（表9）。これにより商人と職人で環境調整行動が全体的に異なり、特に打ち水に関しては、商人とその妻により行われていたと判断できた。一方、縁台に関しては、すべての属性に共通して、夕方の昼七ツに表通りおよび路次に設置していたこと、また、明六ツより昼七ツまで、建物開口部を開放し、暖簾またはスダレを設置していたことが示された。

6. まとめ

本報は、江戸町人地の屋外生活空間の夏季の熱環境を、数値シミュレーションより再現した表面温度分布から評価する上で必要となる町屋敷居住者の夏季一日における滞在空間と環境調整行動の内容とその変化の特徴を考察することを目的とし、まず記載内容がある程度検証されている江戸と明治の両時代の史料のみを対象に、各属性の居住者の主要な生活行動を時間区分ごとに把握した。その生活行動を元に、各時間区分における居住者の滞在空間と環境調整行動の日変化を明らかにした。これにより、限られた史料からの判断ではあるが、江戸町屋敷内の夏季一日の滞在空間が居住者の属性および時間区分ごとに異なっていたこと、居住者による環境調整行動が特定の時間区分と生活空間を対象に行われていたことを示した。

また今後、江戸町屋敷の屋外生活空間の熱環境を評価する上で必要となる居住者による熱環境緩和のための建築的な工夫と生活行動の調整に関する情報を整備した。これも限られた史料からの判断ではあるが、具体的には以下のことを明らかにした。

1. 滞在空間に関しては、出職以外の属性の居住者は一日の多くを屋内で過ごしたこと、夕方の昼七ツから日没後の暮六ツにかけてすべての居住者が表通りに滞在したこと、夜が明ける明六ツと夕方の昼七ツに裏長屋に住む職人と職人の妻が路次に滞在したと想定することの妥当性が示された。
2. 環境調整行動に関しては、商人と商人の妻により打ち水が行われたこと、すべての属性の居住者が夕方の昼七ツから夜の暮六ツまで表通りか路次に縁台を設置していたこと、表長屋・裏長屋の両建物で明六ツより昼七ツまで建物開口部を開放して暖簾またはスダレを設置していたと想定することの妥当性が示された。

表9 夏季一日における各属性の町屋敷居住者の環境調整行動

居住者の属性	明六ツ 4:40 ~	朝五ツ 7:00 ~	朝四ツ 9:20 ~	昼九ツ 11:40 ~	昼八ツ 14:00 ~	昼七ツ 16:20 ~	暮六ツ 18:40 ~	夜五ツ~ 20:20 ~
A) 商人 B) 商人の妻			葎の開放 暖簾の設置					開口部の閉鎖 葎を下げる
		打ち水			打ち水	縁台の設置		
C) 職人:居職 D) 職人の妻			開口部の開放 スダレの設置					開口部の閉鎖 雨戸の設置
						縁台の設置		
E) 職人:出職	-	-	-	-	-	開口部の開放 スダレの設置 縁台の設置	開口部の閉鎖 雨戸の設置	

—：町屋敷における居住者による環境調整行動が無い

参考文献

- 1) 梅干野晃, 浅輪貴史, 中大窪千晶: 3D-CADと屋外熱収支数値シミュレーションを一体化した環境設計ツール, 日本建築学会技術報告集, 第20号, pp. 195-198, 2004. 12
- 2) 高田真人, 村上暁信, 梅干野晃: 数値シミュレーションによる夏季熱環境の評価を目的とした江戸町屋敷の配置計画・空間形態・構成材料の再現, 江戸時代後期の江戸町人地における居住者の生活行動を考慮した夏季熱環境の評価 その1, 日本建築学会環境系

論文集, 第 648 号, pp.237-245, 2010.2

- 3) 玉井哲雄: 江戸町人地に関する研究, 近世風俗研究会, 1977
- 4) 小木新造: 東京庶民生活史研究, 日本放送出版協会, 1979
- 5) 塚田孝: 社会集団をめぐって, 近世日本身分制度社会の研究, 兵庫部落問題研究所, 1987
- 6) 高橋康夫, 吉田伸幸編: 日本都市史入門, I 巻〜III 巻, 東京大学出版, 1998-1990
- 7) 吉田伸幸編: 日本の近世, 第 9 巻, 中央公論社, 1992
- 8) 塚田孝, 吉田伸幸編: 近世大阪の都市空間と社会構造, 山川出版社, 2001
- 9) 伊藤毅: 近世大阪成立史論, 生活史研究所, 1987
- 10) 伊藤毅: 境内と町, 年報都市史研究, 第 1 巻, 山川出版社, 1993
- 11) 伊藤毅: 都市の空間史, 吉川弘文館, 2003
- 12) 都立一橋高校内遺跡調査団: 江戸-都立一橋高校地点発掘調査報告, 都立一橋高校内遺跡調査団, 1985
- 13) 例えば, 東京大学理学部遺跡調査室: 東京大学本郷構内の遺跡 理学部 7 号館地点 [東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 1], 東京大学理学部遺跡調査室, 1989
- 14) 浦野良美, 渡辺俊行, 林徹夫, 内山明彦: 九州北部に残る伝統的民家の熱環境に関する調査研究, 日本建築学会計画系論文報告集, 第 371 号, pp. 23-32, 1987.1
- 15) 石田秀樹, 荒谷登, 佐々木隆, 絵内正道: 開放系住居の夏の環境特性, 町家の冷氣積層型の上方向開放空間, 日本建築学会計画系論文報告集, 第 408 号, pp. 23-32, 1990.2
- 16) 吉田伸幸: 近世都市社会の身分構造, 東京大学出版会, 1998
- 17) 喜多川守貞: 守貞謄稿, 1837-1853
- 18) 内田正男: 日本暦日原典, 雄山閣出版, 1975
- 19) 齊藤月岑: 東都歳事記, 1838
- 20) 菊池喜一郎: 江戸府内繪本風俗往来, 平凡社, 1976
- 21) 平出鏗二郎: 東京風俗志, 富山房, 1899-1902
- 22) 若月紫蘭: 東京年中行事, 春陽堂, 1911
- 23) 寺門静軒: 江戸繁昌記, 1832-1836
- 24) ロバート・フォーチュン著, 三宅馨訳: 幕末日本探訪記 - 江戸と北京, 講談社学術文庫, 1997
- 25) 小泉八雲, 平井呈一訳: 日本瞥見記, 全訳小泉八雲作品集, 第 5 巻, 第 6 巻, 恒文社, 1964
- 26) エドワード・S. モース, 石川欣一訳: 日本その日その日, 創元社, 1939
- 27) 例えば, 石黒敬七コレクション保存会: 開花写真鏡 - 写真にみる幕末から明治へ -, 大和書房, 1975
- 28) 例えば, 金井圓: 描かれた幕末明治 - イラストレイテッド・ロンドン・ニュース 日本通信 1853-1902 -, 雄松堂書店, 1973
- 29) 野口孝一編著: 明治の銀座職人話, 有限会社青蛙房, 1983
- 30) 佐藤龍夫: 煉瓦地, 1940-1941 (中央区立京橋図書館地域資料室所蔵)

注

- 注 1) 当時の日本における 3 つの大都市は「三都」と称され, 江戸時代後期における各都市の町人地の人口は, 江戸が 53-54 万人, 大阪が 34-35 万人, 人口に関する情報がほとんど残っていない京都が 30 万人台から 20 万人台におちる程度である。この時期における大阪と京都の町人地の面積はそれぞれ 8.7km², 8.4km² 程度であり, 江戸町人地の面積 8.8km² とほぼ同等である。したがって, 当時の江戸町人地の人口密度は日本最大である。(関山直太郎: 近世日本の人口構造, 吉川弘文館, 1958.1)
- 注 2) 本研究で扱う江戸町人地とは, 江戸時代 (1600 - 1867) を通じて江戸町人文化の中心地であった神田-日本橋-京橋一帯の町人地を指している。
- 注 3) 町屋敷とは「町割によって形成された, 多くは矩形の土地区画」の総称であり, 「町方の家屋敷という意味」の町人地における行政上の最小単位であった。現代の街区と類似する空間単位であった。内部には共同住宅である長屋 (=裏長屋) と狭い路次 (=路地) が入り組んでいた。(玉井哲雄: 江戸町人地に関する研究, 近世風俗研究会, 1977)
- 注 4) 江戸時代後期における日本の時間は日中 (日出から日没まで) と夜間 (日没から日出まで) をそれぞれ 6 等分し, 計 12 分割する不定時法 (寛政暦, 1844 年以後は天保暦) に基づいている。本研究はこの時間法に基づき, 居住者の夏季一日の生活行動を把握した。
- 注 5) 「もっとも信の置ける江戸風俗・民俗のまとまった資料集成として, 文化史および民俗学研究者に不可欠の座右の書である」(田原久: 『守貞謄稿』について, 月刊文化財, 第 134 号, pp.12-18, 1974)
- 注 6) 「三都ともに諸工を太久美と云ず職人と云。大工左官等其他ともに専

ら他に出て業を為すを出職と云。てじよくと訓ず。家に在て業するみしよくと云。居職也。(略) また大工左官以下造家に拘る者を京坂にて俗にふしんかたと云。普請方也。江戸にてやじよくにんと云。家職人也。」(喜多川守貞: 守貞謄稿, 1837-1853)

注 7) 「今世も, 前に云る如く, 齒染て始て嫁するを本とす。然と雖ども, 民間に至りては, 京坂の女二十歳, 江戸は二十未満の少女も, 未嫁して歯を染る者, 太だ多し。」(喜多川守貞: 守貞謄稿, 1837-1853)

注 8) 1843 年までは寛政暦, 1844 年以後は天保暦が適用されている。

注 9) 『日本暦日原典』¹⁸⁾より同定した太陽暦での大暑の月日に関して, 『国立天文台天文情報センター暦計算室』(<http://www.nao.ac.jp/koyomi/>) (2010.10.29 参照) より日出時間と日没時間を求め, その平均値を本報で使用する日出時間と日没時間に設定した。

注 10) 当時の状況を人々の証言から把握する場合, ある程度の数が必要となる。座談会に関する記載は, 当時を知る人間が共通の話題に対して複数の情報を提供するため, ある程度の客観性を確保できる。(参照: (a) 野村公雄, 二村進, 平井程一: 古老座談会, 季刊 日本橋, 創刊号, 日本橋研究会, pp.110-121, 1935, (b) 野村公雄, 二村進, 平井程一: 「商家夜話」座談会, 季刊 日本橋, 第 3 巻, 日本橋研究会, pp.113-122, 1935, (c) 野村公雄, 二村進, 平井程一: 「商家夜話」座談会, 季刊 日本橋, 第 4 巻, 日本橋研究会, pp.114-119, 1936)

注 11) 「第一の巻頭の附言に月岑自身, 江戸の年中行事を記せる先行文献をあげている。即ち, 江戸惣鹿子, 江戸砂子拾遺, 江戸めぐり, 江戸名勝誌, 惣鹿子名所大全, 武蔵志料, 増補江戸年中行事, 東都年中参詣記, 一枚刷の年中行事, 神仏参詣記, 縁日略記, 花暦及び東都四時遊観録, 花信風 (略) 『東都歳事記』は, 以上の年中行事及び遊観録を合したものと見て, ここになったものと見てよいであろう。」(朝倉治彦: 解題, 東都歳事記 3, 東洋文庫, pp.211-227, 1972)

注 12) 「『東京風俗志』も, (略) 東京の庶民生活に関する最初の体系的な記録といえるもので, 精緻な挿絵図版とあいまって現在もお高い資料的価値を認められている」(紀田順一郎: 解説 よみがえる明治の世相風俗, 東京風俗志 下, 筑摩書房, pp.278, 2000)

注 13) 「明治末期の, 東京に於ける歳時風俗を伝えるに, この書の右に出るものなきは, この日刊新聞という場より出発したればこそ, それだけの報道性を盛り込み得たのであった。」(朝倉治彦: 解説, 東京年中行事 1, 東洋文庫, pp.183-187, 1968)

注 14) 明治時代の史料に記載されている行事の中には, 旧暦のまま開催されたものと新暦に置き換えられて開催されたものとが混在している。本研究では江戸時代の史料で夏季の行事と言及されているものを基準として, それらが明治時代の史料に記載されているか否かで判断した。

注 15) 本研究で扱う回顧録形式の史料とは, 大正 12 年 (1923) の関東大震災を契機に東京が破壊され, それまでの庶民階層の生活が一変したことを受け, 震災以前の日常生活を懐かしむ人々が後年作成した文書を指す。

注 16) これらの回顧録が対象とする銀座弥左衛門町と銀座錦屋町は隣接している。これらの町は, 本研究 1 報目²⁾で設定した本研究の対象地である守山町とも近接している。

注 17) 町屋敷内の表長屋の建つ敷地は表坪, 残りは裏坪と総称する。

注 18) これら選定した史料はすべて本節以前の章または節および本研究 1 報目において, その記載内容が検証されている。

注 19) 文献 28) に描かれている彩色図版の原画は, 幕末期および明治時代に日本を訪れた通信員チャールズ・ワーグマンが描いている。

注 20) 「一町に一湯屋が許されたともいわれるが, 火災のおおい江戸では湯屋の開業は制限されており, (略) 文化一〇年代は六〇〇余軒とつたえられる。」(今田洋三: 湯屋, 江戸東京学事典, 三省堂, pp.439-440, 2003)

注 21) 明治 31 年生まれの著者の祖母なので, 幕末期の生活を指している。

注 22) 「『江戸繁昌記』には, 天保の改革前で, 髪結床四八組九六四戸とあり, 仲間外の下職の者二〇〇〇人とある。」(今田洋三: 床屋, 江戸東京学事典, 三省堂, pp.437-438, 2003)

(2009年12月8日原稿受理, 2010年12月8日採用決定)